

---

# あの時にこの物語は始まった...

山ちゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの時にこの物語は始まった：

### 【Nコード】

N54780

### 【作者名】

山ちゃん

### 【あらすじ】

普通に暮らしている少年の前に自殺をしようとする女の子。その子を助けようと決心した少年。たぶん恋愛？ストーリー

## 【第二話】（前書き）

初登校なので、  
ガムシヤラに書いていこうと思います。

## 【第一話】

20XX年7月16日 月曜日  
初夏

????:

あついな

なぜこんなに暑いかな

: さてコンビニに行くか

僕はいつも通りコンビニ行く。  
毎週月曜、水曜に通っている。

店員さんにも顔を覚えられている。

さらに!!

名前すら覚えられている。

我ながら情けない。

店員さん:

いらっしやいま…。

ってまたシヨウちゃんか!

とんだ暇人だね

シヨウ:

わるゝございますねー

ま、漫画読んだ後に何か買うから店としては大丈夫だろ?

店員さん:

まあ助かるけどさ…

僕はいつも通り漫画を読み、今日はプリンを買った。

僕はフラフラとコンビニを出た。  
高校の授業終わりに寄ったから薄暗い。  
まあいつも通り。

今日は珍しくCDチェックをしたくなつた。  
僕は自転車をもたぎフラフラと向かった。

シヨウ：  
うわゝ

思わず声に出してしまった。  
自転車置き場には大量の自転車。  
溢れんばかりに置いてある。  
僕の自転車もソコに仲間入りさせた。

中に入るとやはりと言ふべきか人がいっぱい。  
大変だろうな…と思いつつも割入ってみた。  
案外スイスイと入り込めた。  
その時、ふと思ひ出した。

『あれ？  
先週きたんじゃない？』

無駄足だった。

店を出て自転車を取ってくる。

誰もいない。

さつきとは大違い。

僕は家に帰る事にした。

ゆっくり帰っている途中に信号につかまった。

ここらでは開かずの信号と言われている。

溜め息をつきながら待っていると隣に同じ学校の制服を着た女の子がやって来た。

女の子：

もう私は、いらない人間なんだ…

もういいんだ…

と、呟いている。

あまりに深刻そうだから声をかけようとした瞬間。

女の子が沢山車が行き交う道路に飛び出した。

ドン

あまりに軽い音がした。

人間が壊れる音はこんなに儂い音なのか…

僕は慌てて駆け寄った。

息はある。

シヨウ：

大丈夫か！？

おい！！

これが彼女との初めての出会いだった。

## 【第一話】（後書き）

読んで下さりありがとうございました。  
もしよかったですら続きもよろしく願います！！

## 【第二話】（前書き）

続きを書きました！

どうぞご覧下さい！！



## 【第二話】

周りは暗く、明かりといえば手術中と書いてあるライトだけ。  
女の子が救急車で病院に運ばれてから、どれくらい時間は過ぎただろうか…

果てしない時間が過ぎたと僕は感じた。

僕は静かにトビラの横の小さなベンチに座っている。

冷静そうに見えて内心ではとてもパニックになっている。

頭の中は手で直接混ぜられたかのようにぐちゃぐちゃ。

目の前であんな事が起きたがら吐き気もする。

ダレカ…ダレカボクラタスケテ…

カチッ

ライトが消えた。

僕は慌ただしく立った。

すると中から男の人が現れた。

手術を担当していた人らしい。

先生：

大丈夫ですよ。

安心して下さい。

見た目ほど怪我は、ひどくありません。

その後いくつか説明を受けた。

『右足の骨折、左手の腱の切断。

右足はまだ軽いらしい。

しかし左手の腱が悪く切れたため、以前のようにには動かなくなるだ

ろう。』

との事だった。

僕はどんな顔をして彼女に会えばいいのだろう。

初めて話す子なのに…

どうすればいいのだろう。

## 【第二話】（後書き）

やっぱり小説は読むのは簡単でも、書く方は難しいなと思いました。  
プロの小説家さん達は凄いなということがひしひしと感じられました。

では、このへんで。

次回もよろしくお願いいたします。

**【第三話】（前書き）**

第三話投稿します。

### 【第三話】

先生との話も終わり、彼女の部屋に向かった。  
その途中、話し声が聞こえた。

看護婦 A：

さっき、救急で運ばれた子いたじゃない？

あの子の事を言っているのだろうか。

失礼だが少し聞いてみよう。

看護婦 B：

いたいた。

それがどうしたの？

看護婦 A：

その子の生徒手帳に親の電話番号があったから連絡したのよ。

何て返事が返ってきたと思う？

『あ、そうですか。』

の、たった一言で電話を切ったのよ。

看護婦 B

なにそれ！

ひっどーい！！

この世界には、そんなに酷い親がいるのか！？  
自分の子供が入院してるんだぞ！！

僕は今理解した。

なぜ先生が僕に彼女の状態を話したのか。

看護婦の話を聞き終わり彼女の部屋についた。  
彼女のベッドの横の椅子に座った。  
と、同時に

女の子：

んゝ、ん？

ここは…どこ？

彼女は周りをじっくりと見渡して言う。

シヨウ：

ここは大成病院だよ。

女の子：

あなた、誰？

シヨウ：

僕は田口彰タグチ ショウ

君は？

女の子：

私は、坂本芳佳サカモト ヨシカ

僕はさつき看護婦が言っていた事が信じられない。  
だってあの看護婦はこの子の名前を言っていないし、そんな酷い親  
がいるわけない。  
そう思い聞いてみた。

シヨウ：

芳佳ちゃん、親はどう…

途中で喋れなくなった。

返事を聞かなくても分かった。

明らかな顔色の変化。

これはマズい。

シヨウ：

あの…

女の子：

うっ…うっ…

うわー

泣き出してしまった。

彼女はこの日、泣き疲れて寝るまで泣き止まなかった。  
僕はただ、

シヨウ：

ごめん…

ごめん…

と、謝る事しかなかった。

### 【第三話】（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

長く書こう、長く書こうと思って書いてみても、切りのいい所で終わると1ページ。

次こそがんばります。

次の話もどうかよろしく願いたします。



【第四話】（前書き）

第四話突入しましたー！！

#### 【第四話】

朝？

もう朝なのか。

僕は昨日彼女が眠った後まっすぐに家に帰った。  
家に帰ったのはいいものの一睡もできなかった。  
しかももう眠れそうにない。

なので朝食を食べに私室を出て1階へ向かう。

1階には父と母がいた。

妹はもう学校に行ったみたいだ。

シヨウ：

おはよ。

母：

おはよー。

うわっ

どうしたのその目の下のクマ！！

シヨウ：

ちよっと眠れなくてね…

父：

遅くに帰ってきたと思ったら全然食事もとらないで部屋に入って。  
昨日何かあったのか？

僕は言えることは全て話した。  
話すと楽になれると思った。

父：

そうか。

なら今日は病院へ行ってその子のそばにいてやれ。学校には適当に理由を言っただけで休みをとつてやるから。

母：

そうね。

いつてらっしゃい。

それが今あなたにできる唯一のことよ。

僕は涙が出そうになった。

僕は準備をしてから病院へ向かう。  
途中で果物の詰め合わせを買った。

病院に着くと病院の中は騒がしかった。  
嫌な予感がした。  
急がないと！！

僕はエレベーターのボタンを押す。  
しかし待ちきれなくなり、階段であがった。  
嫌な予感的中した。  
的中してしまった。

芳佳ちゃんは松葉杖でベランダまで行き飛び降りようとしていた。  
興奮気味らしく息が荒い。  
看護婦が1人やって来た。

看護婦：

あの…

シヨウ：

言われなくても見れば分かります。それより失礼ですがあなた方はこの部屋から出て下さい。

こんなに人がいるともっと興奮すると思っんです。

僕の願いを受け入れてくれたらしく大勢いた看護婦達はぞろぞろと出ていった。

シヨウ：

まずは落ち着こうか芳佳ちゃん。

ヨシカ：

嫌だ！！

私は死ぬんだ。

もういない子なんだ！！

シヨウ：

大丈夫だ。

僕は見捨てない。

僕はゆつくりと芳佳ちゃんに近づく。

ヨシカ：

ありえない。

ありえない。

アリエナイ。

みんな私を見捨てていく。

私を誰も見てくれない。  
いなくなっても誰も困らないんだ！！

芳佳ちゃんは右手を降り否定した。

しかし芳佳ちゃんは右手の松葉杖と左足で立っている。バランスを崩し、前から倒れる。

僕は優しく受け止め、優しく抱きしめた。

シヨウ：

ほら大丈夫だ。

僕は絶対に見捨てない。

誰も君を必要としないなら僕が必要としよう。

芳佳ちゃんは泣いた。

今度は僕の腕の中で。

#### 【第四話】（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

第四話が頭の中の下書きで一番ボツが多かったです。  
ここまで仕上げるのにだいぶ時間がかかりました。

さてここら辺りで。

次も読んで貰えたら嬉しいです。

## 【第五話】（前書き）

第五話投稿します。  
ゆっくりとどうぞ。

## 【第五話】

芳佳ちゃんはその後、何回も何回も噛みしめるように僕に尋ねる。

ヨシカ：

本当に見捨てない？

僕は優しく答える。

シヨウ：

ああ、見捨てない。

僕の特技は知り合った人とは、ずっと仲良くいられることなんだ。

これは嘘ではない。

ヨシカ：

嬉しい！嬉しい！！

芳佳ちゃんは嬉しそうに受けとめる。

（数分後）

ようやく芳佳ちゃんの感情の高まりが静まりベッドに戻った。

僕は頃合いを見計らって切り出した。

シヨウ：

落ち着いた所で僕といくつか約束してくれる？

ヨシカ：



内容によるわ。

シヨウ：

分かった。

まず1つ目。

絶対に自殺をしようとしないこと。もし自殺をしようと思ったらすぐに僕に連絡すること。

僕がこの命にかけても君を救う。

2つ目

私は知らない子だって絶対に言わない事。

君とは、まだ知り合って間もないからこれだけだけど、ダメだと思うことはどんどんこの約束の中に入れていくからね。

ヨシカ：

分かった。

約束する。

そのかわりあなたも1つ約束して。

私を…見捨てないで。

僕は芳佳ちゃんの手を握りしめ

シヨウ：

絶対にその約束は破らないよ。

と答える。

芳佳ちゃんの手は震えていた。

シヨウ：

あ！

そうだ！！

もう一つ約束…って 言うか、これはお願いかな？  
前髪を切らないかい？  
ほら、こうすれば可愛いじゃないか。

僕は、鼻の頭まで伸びている芳佳ちゃんの前髪を上げる。  
マジで可愛い。

前髪がある時はまるで貞子みたいだ。  
誰が見てもそう思うだろう。

ヨシカ：  
い、嫌よ。

なんで切らなくちゃならないのよ！！

真っ赤な顔で否定する。

初めて人の顔が赤くなるのを見たかもしれない。

と言うわけで、

今日はただひたすら喋った。

趣味、特技、好きな歌手、好きな食べ物 e t c .

いくつか同じだという所もありさらに盛り上がった。

あっと言う間に時間は流れ、

ショウ：

そろそろ帰らないと。

ヨシカ：

うん。

そ、その…

ショウ：

また明日でしょ？

言うのが恥ずかしかったみたいだから先に言ってあげる。

ヨシカ：

また明日ね。

えへへ。

恥ずかしげに言う姿がさらに可愛い。

だけと思いつ出す。

学校がある。

シヨウ：

ごめん！！

明日は学校に行かないと。

芳佳ちゃんは淋しそうに言う。

ヨシカ：

そう…。

これはダメだ。

後に付け足す。

シヨウ：

けど、夕方に来るさ！

芳佳ちゃんは明るくなった。

良かった。

シヨウ：

それじゃまた明日。

ヨシカ：

うん。

僕は病室を出る。

そう僕らはまた明日会える。

【第五話】（後書き）

今回初めて芳佳の明るい場面を書いてみました。  
なかなか”可愛い”を表現するのが難しかったです。

さてこのへんで。

次回も良かったら読んでって下さい。

【第六話】（前書き）

ついに六話です。

ぜひぜひ読んでほしいと思います。

## 【第六話】

ふと気付けば周りは真っ暗。  
デジャヴ？

なぜここにいるのだろう。

わからない。

そんなことを考えていると…

ピリリリリ。

ピリリリリ。

ポケットから携帯を取り出す。

ディスプレイには坂本芳佳と書いてあった。

ショウ：

はい、もしもし。

ヨシカ：

………

返事はない。

もう一度。

ショウ：

もしもし？

ヨシカ：

………

よく聞けば小さな声で何か言っている。

シヨウ：  
よく聞こえないよ。  
もう一回言っ…

芳佳ちゃんは答えた。

ヨシカ：  
私もう耐えられない。  
死ぬわね。

シヨウ：  
ちよっと待って!!  
今どこ!?

そう言った瞬間ふわっと周りの風景が変わった。  
目が慣れた時見たのは芳佳ちゃんの病室。  
芳佳ちゃんはやはりベランダにいた。

シヨウ：  
待つんだ!

僕は叫んだ。  
走って止めようと思った。  
しかし、僕の体は動かない。  
足に根が生えているかのように。  
僕はもがくけれど、動く気配がない。  
僕は叫ぶことしかできない。

シヨウ：  
落ち着くんだ。



いまそつちに行くから。

待って。

待ってくれ。

僕が一番落ち着いてない。

急がなくては。

イソガナクテハ。

彼女は飛び降りた。

飛び降りてしまった。

僕は彼女を助けてあげることが出来なかった。

約束を守ってあげることが出来なかった。

これ以上悔しいことはない。

辺りはいつきに暗くなっていく。

口の中は血の味。

なんて、なんてちっぽけなんだ…

『シヨウ、シヨウ…』

幻聴？

嫌、違った。

母が僕の体をゆすっていた。

母：

シヨウ、起きなさい。

シヨウ：

分かった。

夢だったようだ。

しかしあまりにリアル。

僕は怖くなった。

こんな心構えで本当に彼女を救えるのか。  
寝汗でベチャベチャだった。

僕は朝食を済ませすぐにメールをする。  
もちろん芳佳ちゃんだ。

（メアド、電話番号は昨日交換した）  
さすがにあんな夢を見た後だ。  
メールを送りたくなるだろう。  
だけどメールは返って来なかった。

## 【第六話】（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今回は”彰の不安”を夢で見たという話です。

無意識の内でも不安は積もると夢に出ると言う私の実体験を書いてみました。

次回もよろしく願います。

【第七話】（前書き）

七話です。

七話です。

## 【第七話】

不安がつもる。

しかしまだ昼休み。

授業には手が着かず、

ただただ黒板の文字をノートに写すだけ。

弁当を食べ終わり、

自分の机で、ぼーとしていると、

???：

あっひゃっひゃっひゃ!!

彰のそんな暗い顔初めて見たよ。

あひゃひゃひゃひゃ!!

ひーひー。

シヨウ：

そんな笑わなくてもいいだろ、敦士。

こいつは由条 ユウジヨウ 敦士 アツシ

無二の親友だ。

笑われてもそんなに腹はたたない。

こいつはバカ正直だから嘘をつけない。

幼なじみだから、それくらい分かる。

多分、僕はこの四時限ずっとんでもない顔をしていたんだろう。

アツシ：

お、お前がそんなに悩むなんて、め、めずらしいじゃない…かつは  
ははは!!!

シヨウ：

笑いながら言っても分からないぞ…

それを聞いて敦士は深呼吸をしていつもの顔に戻した。

アツシ：

お前がそんなに悩むなんてめずらしいじゃないか。

シヨウ：

まあね。

アツシ：

無理には聞かねえが困ったら俺の所に来いよ。

一人より二人の方がいいこともある。

シヨウ：

ああ、ありがとな。

肩が軽くなったよ。

本当に軽くなったような気がした。

アツシ：

それと、教室にいるときは普通にしろよ。

みんな心配してる。

じゃな。

と言い、敦士はどこかに行ってしまった。

僕は周りを見渡す。

みんな心配そうな目で見ている。

全然気づかなかった。

僕はみんなに謝った。

〔放課後〕

僕はすぐに病院へ向かった。

大丈夫だと思うが無意識に早足になる。

病院に着く頃には汗だくでゼーゼーだった。

自分の体力の無さに嫌気がさす。

まあ部活は、やってないしな。

と自分に向けて言う。

うん、病室へ行こう。

部屋に入ると芳佳ちゃんはベランダにいた。

シヨウ：

…っ！？

僕は走った。部屋を走った。

僕は芳佳ちゃんの怪我していない方の手を取る。

ヨシカ：

何！？

どうしたの！？

シヨウ：

落ち着くんだ。

はやまるな！！

ヨシカ：

あなたが落ち着いて…。

シヨウ：

へ？

芳佳ちゃんは風邪にあたりにベランダに出ていたらしい。

メールは見なかったらしい。

いや、ここは見れなかったと言った方がいいだろう。

なぜなら、芳佳ちゃんは僕が帰った後、前髪を切った。

今日見せて驚かせようと思った。

けど、前髪を切ったよとメールしたい自分がいた。

だから携帯の電源を切り引き出しにしまい我慢していたらしい。

僕は笑ってから言う。

シヨウ：

やっぱりかわいいよ。

ヨシカ：

…バカ。

芳佳ちゃんは耳まで赤くして言う。



## 【第七話】（後書き）

これを書いていて不覚にも、  
敦士いいやつだなあ

と、自分で思っしまいました。

良かったらコメントと感想を…

次の話もよろしく願います。

【第八話】（前書き）

八話投稿します。

## 【第八話】

今日は夢の話で盛り上がった。

自分的には恥ずかしかったけれど、芳佳ちゃんが喜んでくれればOKだろう。

こんな話もそろそろ終わらなければならぬ時間が来たとき、芳佳ちゃんは切り出した。

ヨシカ：

あのさ。

提案なんだけど…

シヨウ：

うん。

ヨシカ：

”ちゃん”とか”くん”って、よそよそしい呼び方やめない？

シヨウ：

…え？

ヨシカ：

だから、呼び捨てでいいんじゃない？

シヨウ：

いいけど…

少し恥ずかしくないか？

と言おうとしたが、その言葉を僕は呑み込んだ。

ヨシカ：

じゃ、じゃあ彰、、

シヨウ：

よ、よ…芳佳。

『ドッカーン』

と頭の中で感情と言う名の爆弾が弾けて空になった。

放心ってこれの事を言っただなあ。

ヨシカ：

彰、彰！！

しっかりして。

揺さぶられ、ようやく現実へと帰還。

僕は大丈夫か？

これくらい普通に出来て当たり前だろう。

それから数分後。

僕は病室をあとにした。

その帰り道ふと気づいた事がある。

彼女の病室をあとにした時に僕を取り囲むこの寂しさと儚さは何だろっ。

分らない。

翌日、結局正体が分からなかった僕は経験豊富な敦士に聞いてみることにした。

シヨウ：

…ということなのかな。

これどういうものなんだ？

自分じゃ理解できないんだが。

敦士は開いたクチが塞がらないと言う感じの顔をしている。  
しまいには一人で頷き、つぶやき始めた。

アツシ：

そうか。

ようやく彰も…

シヨウ：

おい。

一人の世界に入り込まないでくれ！。

アツシ：

あ、悪い悪い。

分かった。

単刀直入に言おう。

それは恋だ。

シヨウ：

恋！？

アツシ：  
そう。

あの万病に効くと言われる草津の湯でも治らない恋の病だよ。

シヨウ：  
オヤジ臭いぞ。

アツシ：  
とにかく。

お前はみんなと平等に接してきた。  
男女平等にな。

だから恋なんて感情を抱いたことがなかったんだ。  
そして初めて恋をしたからそれが理解できなかったんだよ。

シヨウ：  
そうなのか。

と頷きながらも納得できなかった。  
敦士の言つとおり恋と言つものを一度もしたことがない。  
本当にこれが恋なのか？  
僕は分からない。

## 【第八話】（後書き）

感想、コメントお待ちしております。

【第九話】（前書き）

九話いってみましょう。



## 【第九話】

結局、昨日はモヤモヤとした気分のままだった。そう。

霧がかかったようなモヤモヤ。

なかなか気分が悪い。

しかしその霧の中に1つの点がある。

その点に視点を合わせ、徐々に近づいてみる。

『ずっと芳佳のそばにいたい』

これが恋？

やはり分からない。

放課後。

ダイソーと果物店に寄っていく。

彼女の所に近づくにつれて楽になっていくような気がする。

シヨウ：

芳佳ちゃん、また来たよ。

芳佳ちゃんはふくれっ面になる。

僕は何かしたか！？

記憶を辿ってみる。

新しい順から…

挨拶をした。

病室に入った。

学校をでた。

授業。

家を出た。

起きた。

寝た。

家に帰った。

病室を出た。

約束をした。

約束…

ああ、そういうことか。

シヨウ：

今日も来たよ、芳佳。

僕は訂正をした。

ヨシカ：

いらっしやい。

待ってたよ、彰。

僕はバスケットを芳佳ちゃ…

訂正。

バスケットを芳佳に渡し、近くの椅子に座る。

シヨウ：

調子はどう？

ヨシカ：

良いわよ。

先生がね、足の治りが早いから来週には退院できるかも、だって。

シヨウ：

マジで！？

おめでとう。

そう。

芳佳の足は、たいした怪我じゃない。  
治りが早いのも頷ける。

ヨシカ：

ありがとう。

嬉しそうに答える。

僕も素直に嬉しい。

その時、

ぐうぐう

と僕の腹になる。

ヨシカ：

…ップ。

あははははは。

シヨウ：

あはは…

恥ずかしい。

ちよつとした沈黙の時に鳴ったため響いた。  
顔から火が出そうだ。

ヨシカ：

彰が持って来てくれたリンゴを食べましょう？

シヨウ：

ありがとう。

芳佳はバスケットからリンゴを取り、僕に渡す。

僕は百円均一で買った果物ナイフを手にとりリンゴをむく。

僕はリンゴを初めてむいた為かリンゴがイビツな形に精製されていく。

そんな様子を見た芳佳は耐えきれなくなったらしく、

ヨシカ：

ナイフの握り方はこう。

と僕の手をとり正しい握り方にする。

ドクン

胸が苦しくなった。

けれど辛い。

ずっとそばにいたい。

ずっと触れていたい。

僕はようやく理解した。

これが恋なんだなあ。

半分綺麗にむけたリンゴを八等分にする。

皿にのせ、芳佳に渡す。

ヨシカ：

はい。

芳佳はリンゴの1つを僕の口に向かって持ってくる。

ショウ：

あーん。

食べる。

リンゴは甘く、そして美味しかった。

【第九話】（後書き）

ありがとうございました

今回は彰が恋をようやく理解するという話でした。  
御意見、御感想をお待ちしています。

【第十話】（前書き）

やっと十話行きました。

## 【第十話】

人はなぜ異性と愛し合ったりするのだろうか。

自分のため？

あるいはその人のため？

僕は自分のためでもありその人のためであると思う。

互いに支え合い、助け合い、暮らしていく。

ただの他人同士じゃ無理だろう。

分かり合った者なら、お互いを分かち合った者ならどんな壁でも乗り越えられる。

そういうモノだと僕は思う。

だから僕は人を愛せなかった。

いや、愛することができなかった。

僕は『人を支える』ようなチカラを持っていない。

だから恋を、愛をしたことがなかった。

しかし僕は…

ゴーン…

僕は顔面から電柱にぶつかった。

そうとう痛い。

登校中に考え事をするものじゃないな。

まだ頭の中でゴーン…と鳴り響いている。

学校に着くと敦士がいた。

それともう一人。

敦士の彼女。



ガールフレンド。

ミスキ カナデ  
水城奏

が教室で、二人きりでいた。

この子も幼なじみ。

そしてこの二人は付き合って一年とちょっと。  
高校入学と同時に付き合っている。

アツシ：

よ、よう。

シヨウ：

朝からお熱いことで。

カナデ：

なにもしてないわよ。

ただ喋ってただけなんだからね。

シヨウ：

ふうん。

そうなんだ。

明らか不自然な二人。

まあ仕方ないか。

付き合っているんだから。

〽五時限目〽

今日は平和に時間が過ぎていく。

弁当を食べ腹が膨れて心地よい眠気に身をまかせ寝る。するとポケ  
ットの携帯のバイヴで起こされた。

先生にバレないように見る。

メールを見た瞬間眠気が吹き飛んだ。  
すぐに机の上を片付けカバンに突っ込んだ。  
そしてカバンを持ち教室を出ながら

シヨウ：

先生、気分が悪いので帰ります。

と言い走り出す。

先生は何か言っているがそれどころじゃない。  
急いで向かわなければならなかった。  
あの子のところへ。

【メールの内容】

From 坂本芳佳

Sud ごめんね

Text 約束守れそうにない

【第十話】（後書き）

読んで下さりありがとうございます。  
御意見、御感想をお待ちしています。

## 【第十一話】（前書き）

第十一話投稿します。

## 【第十一話】

僕は走った。

ただひたすらに走った。

がむしゃらに走った。

これじゃこの前に見た夢を再現しているだけじゃないか!!

〔第六話参照〕

今回こそ止めてみせる。

同じアヤマチを二度と繰り返してたまるか!!

まずは病院に行くべきと判断した。

バンッ

乱暴に扉を開け中に入るが芳佳はいなかった。

シヨウ：

どこに行っただんだ!?

僕は頭の中でこの病院の地図を広げる。

誰も立ち入らなくて人<sup>ひと</sup>気の無い場所。

そんな場所あるわけ……

シヨウ：

あつた!!

僕はまた走り出す。

ある場所へ向かって。

その場所とは屋上だ。

なぜならあそこは老朽化が進み工事をする為に一昨日ぐらいに立ち入り禁止になっている。

ちなみに工事開始は四日後の正午。

なぜこんなに詳しいかと言うと昨日、入口に紙が貼ってあったから見たのだ。

バンッ

再び乱暴に扉を開ける。

屋上に出て一番遠い所に芳佳はいた。

シヨウ：

待つんだ、芳佳――！！

精一杯の声で叫ぶ。

芳佳はビクリしてこっちを見る。

ヨシカ：

私、生きてちゃダメな子なの！！

シヨウ：

待って、今そっちに行くから！！

ヨシカ：

さようなら。

今までありがとう。

飛び降りる体制をする。

僕は走る。

間に合え！

間に合え！！

間に合え！！！！

芳佳は動かない。

芳佳のまわりだけ時間が止まったかのように。

僕は一気に駆け寄り一気にこちらに引っぱった。  
そして芳佳を受け止める。

ヨシカ：

……イヤ。

死にたくない。

死ななきゃいけないのに彰が頭の中に現れてっ  
ずっとそばにいたい。

そんな気持ち私が私を引き止める。

なんで！？

どうして！？

今までこんな気持ちになったことないのに……  
うわーーーーーっ

僕は芳佳を抱き締め、

シヨウ：

僕もずっと芳佳のそばにいたい。

誰が何を言おうと君のそばにいて君を守ろう。

そう、僕はずっと人を支える力はないと思っていた。

だから愛することができなかった。

しかし、守りたい人ができた。

支えるよりもずっと大事な事。朝に考えていた問いの答えがようやく出た。

僕は芳佳を守りたい。

病室に戻り、芳佳の話を聞いた。

芳佳：

私の両親は本当の両親じゃないの。

私が5歳の時にお母さんが病気で亡くなったの。

それからお父さんは私を大事に育ててくれた。

本当に感謝してる。

そして私が小学校に入って数ヶ月の時、お父さんは再婚した。

私と義母は最初は仲が良かった。

本当の家族みたいだった。

しかししだいに義母は掃除、洗濯、ご飯を作る事を押し付けるようになった。

さらに、義母はお父さんが私を育てながらもこつこつと貯めてきたお金を湯水のように使い出した。

みるみるに鞆や服が増えていく。すぐに貯金は尽きた。

お金が無くなるとすぐに義母は浮気をしだした。

お父さんが帰りの遅い日は決まって愛人が来る。

こんな生活を耐え忍んで2年。

小学校3年生の時、お父さんはガンで亡くなった。

それからは…

言いたくない。



シヨウ：  
うん分かった。

話している間ずっと辛そうだった。  
聞いている僕がどうにかなりそうなくらいに。

ヨシカ：  
そして今日お昼に義母に電話をしたの。  
あと一週間くらいで帰りますって。  
するとこんな返事が返ってきたの。

『あんた生きてたの。  
てつきり死んだと思って荷物全部捨てちゃったわよ。  
てかなんで生きてんのよ！！  
そのまま死ねばいい』

って。私生きてちゃイケないんだって。

芳佳は震えていた。  
僕も震えていた。  
芳佳は悲しみで、僕は怒りで。  
そんな親がいていいのか、嫌ダメに決まってる。

シヨウ：  
そんな家に帰る必要はない！！  
そうだ僕の家に来たらいい。

ヨシカ：  
…いいの？

シヨウ：

ああいいとも。

ヨシカ：

：ありがとう。

ありがとうっ！！

こうして芳佳は僕の家で暮らすことになった。

【第十一話】（後書き）

どうでしたか？

芳佳の過去を書きました。

書いててけっこう難しかったです。

御意見、御感想お待ちしています。

【第十二話】（前書き）

遅れました（汗）

どうぞごめいください。

## 【第十二話】

ヨシカ：

うわゝ。

大きな家だねっ！！

シヨウ：

両親がいいところに就いているからね。

あれから数日後。

今、芳佳は僕の家の前にいる。

今日からはここが芳佳の住む家なのだ。

シヨウ：

さあ入って入って。

ヨシカ：

お邪魔します。

まずリビングに向かう。

扉を開けると、

パンッパンパンッ

盛大に鳴り響くクラッカーの音。

父・母・妹：

ようこそ芳佳ちゃん

今日からよろしくね！

父さんがとても照れくさそうだ。  
サプライズだ。

ちなみに僕はこのことを知らない。

僕は顔に出るタイプだから知らされなくて当然。

肝心の芳佳は…

とても嬉しそうだ。

ここで僕は家族の紹介をした。 ショウ：

まずは我が家の大黒柱の…

父：

げんどう  
玄道です。

ゲンさんもしくはお父さんと呼んでくれ。

ショウ：

さあ次は我が家の支え人…

母：

れいこ  
礼子です。

れいちゃん…はもうあれだから、お母さんって呼んでね！

ショウ：

最後に僕の妹の…

妹：

まりさ  
真里沙です。

マリちゃんか…

マリちゃんって呼んでね。

ショウ：

どっちもいつしよじゃないか！！

妹：

いつしよじゃないもん！

発音が違うもん！！

笑いが起こった。

さっきまでガツガチに緊張していた芳佳もちよつとほぐれたように感じた。

シヨウ：

えっと、妹が12歳だから小学3年生。

父さんが40歳。

母さんがよげふ。

母さんの拳がみぞおちに撃ち込んできた。  
全然見えなかった。

シヨウ：

ゴホッゴホ

暴力反対っ！！

母：

女性の年齢を言うのが悪いわよ。

シヨウ：

なんだよそれ！

まあいいけどさ。

んじゃ芳佳。

ヨシカ：

うん。

今日からお世話になります坂本芳佳です。  
よろしく願いします。

全員：

よろしく。

父：

芳佳ちゃん、条件を1つ出していいかい？

ヨシカ：

はい。

なんでしょう？

父：

うん。

敬語をやめて欲しい。

今日から僕達は家族だ。

これが唯一の条件。

ヨシカ：

はい。

芳佳はとても嬉しそうだ。

少し涙ぐんでいる。

母：

よし！！

ここでお昼にしましょう！

さあさあ！！



その日のお昼は超豪華だった。

【第十二話】（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

### 【第十三話】（前書き）

十三話投稿いたします。

そして第十二話の間違いを訂正したいと思います。

真里沙は12歳の小3ではなくて9歳の小3です。  
ルークさんありがとうございます。

ではごゆっくりとどつぞ。

## 【第十三話】

昼飯後、僕は芳佳を芳佳の部屋に案内する。  
窓は2つで、机とベッド、そしてマット。

必要最低限の家具しかない。

今は殺風景。

次第に増えていくだろう。

すると芳佳はベッドに腰掛け、

ヨシカ：

はあゝ

おいしかったーっ！！

満足そうな顔を見るとこちらも気分が良くなってくる。  
そんなことを考えていると、

ヨシカ：

彰の家のご飯っていつもあんなに豪華なの？

シヨウ：

いや…

あんな豪華なご飯は初めてだよ。

高校に受かった時も豪華だったけどそれ以上だよ。

正直食べきれなかった。

芳佳もいっぱいいっぱいだったように見えた。

シヨウ：

高校と言えば芳佳も僕と同じ高校なんだよね？

ヨシカ：

そうなの？

ってなんで私の行ってる学校を知ってるの？  
もしかして私のストーカー？

顔が笑っている。

冗談のつもりだろう。

ここはこの冗談に乗るべきだろう。

シヨウ：

そうだよ。

君を助けたのも君をつけてたからなんだよ。

こんな冗談はさておき、

本題に入ろうか。

シヨウ：

本当は事故の時着ていた服から判断したのさ。

ヨシカ：

ああなるほどね。

そりゃ分かりやすいわよね。

私たちの学校の制服は周りの学校に比べて目立つものね。

シヨウ：

そうだよね。

時々制服で町を歩くのが恥ずかしかったり…

ヨシカ：

そうよね。

そうだ！！

何年生なの？

私は2年生なんだけど。

シヨウ：

僕もだよ。

ちなみに1組だよ。

ヨシカ：

私は7組。

同年だったんだね。

てつきり1つ上なんだと思ってた。

シヨウ：

そうなんだ：

なぜかシヨック。

ヨシカ：

ごめんごめん。

????：

芳佳ちゃん。

ヨシカ：

はい！

なんでしょう？

母：

一緒に晩ご飯の買い物に行きましょう？

ヨシカ：

OKですよ！

母：

やった〜！！

女の子と買い物に行くのが夢だったのよ！

シヨウ：

妹がいるだろ！！

母：

あの子は昔から面倒くさがって来ないのよ。

さあ芳佳ちゃん早く行きましょ！！

行ってきまーす！！

お母さんは芳佳の手を強引に引っ張りまるで突風のように走っていた。

しかし1つ疑問が残った。

僕は学校では結構顔が広く友達がかなりいるが芳佳の話を聞いたことがない。

どういうことだろう。

【第十三話】（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。



【第十四話】（前書き）

明けましておめでと〜いねいます。

Good bye 2010

Welcome 2011

＼（＾０＾）／

と〜いわけ〜め〜く〜り〜と〜い〜ト〜ね〜。

## 【第十四話】

シヨウ：

はあ：

もう朝か

結局昨日のモヤモヤが晴らされることなく不快な気分でキッチンへ向かう。

ほとんど寝ていない。

シヨウ：

おはよう。

母：

おはよー。

キッチンには妹、母がいた。

父は朝早くに出ると言うことを聞いている。  
一人足りない。

シヨウ：

芳佳は？

今日一緒に学校に行く予定だったはず。

母：

気分が悪いから休みます。  
だつてさ。

シヨウ：  
そっか。  
なら仕方ないな。

母：  
私から先生に連絡いれるわね。

シヨウ：  
頼みます。

芳佳は休み。  
なら僕はちよつと調べてみようと思う。  
芳佳の事について。

このモヤモヤを払うすべはコレしかないと思う。  
しかし、芳佳のプライバシーに触れたらどうする？

.....うーん。

その時は素直に謝るしかない。  
もし最悪な結果を聞いたとしても僕はこれまで通りに接していける  
だろう。

いや、接していける。  
僕は覚悟を決め学校へと歩き出した。

# 《昼休み》

僕は七組の友人の元へ向かう。

富士 最澄 ふじもりすみ

クラス委員長兼書記長。

クラスにも慕われ、芳佳の事を聞くには持つて来いの人物だ。

シヨウ：

やあ。

モリスミ：

やあ。

二週間ぶりだね。

どうしたんだい？

なにか真剣な顔をしているけれど。

僕に質問かな？

シヨウ：

そうなんだよ。

今日はこのクラスにいる子の質問なんだ。

モリスミ：

ほう。

君が人に関する質問なんて珍しいね。

まあそれはさて置き、内容を聞こうか。

シヨウ：

坂本芳佳についてなんだけど…

モリスミ：

彼女か？

まあ答えよう。

彼女はこの学年にいることはいる。  
そして彼女はあまり顔を見せない。

シヨウ：  
どうして？

モリスミ：  
なぜ来ないのか分からない。  
そして

“ 誰も近づかない”  
と言ったらいいのか、  
いや違うな。

“ 自分から塞ぎ込んで周りが近づけない”  
と言った方が適当だな。  
そのせいでこのクラスに友達がいらないと言っても過言ではないと思  
う。

シヨウ：  
そっか：  
ありがとう。

僕は逃げ出すように七組を後にした。  
いや。

逃げたしたかったんだ。これ以上話を聞いているとどうにかなりそ  
うだ。

だけど今日芳佳が学校に来ない理由が分かった。  
明日からは連れてくる！！  
そう決心した。

【第十四話】（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

## 【第十五話】（前書き）

十五話登校します。

最近宿題や用事が忙しくてなかなか続きを書けませんでした。  
では今回は結構長く書いたのでごゆっくり。

## 【第十五話】

（放課後）

長い長いホームルームが終わり、僕はすぐに家へ帰ろうとした。

アツシ：

彰！！

最悪のタイミングで呼び止められた。

敦士の事だからどうせ…

アツシ：

野球しようぜ！！

シヨウ：

やらない。

じゃあな。

そう。

敦士は野球好きなのだ。

人数が足りないなら公園にいる小学生までを巻き込む。

なかなか迷惑なやつに思われるけれど、なぜか野球をした後は心地良い爽快感。

いや、達成感だな。

全力でさせられる。

他でもない敦士に。

敦士とやると軽くするつもりが全力でやらされる。  
そんな特殊な能力を持っている。



アツシ：

ちょ、お前最近ちょっと冷たくね？

シヨウ：

僕だって暇じゃないことだってあるんだ。

アツシ：

ここ1週間以上聞いてるぞ、それ。

シヨウ：

すまん、本当に忙しいんだ。

アツシ：

分かったよ。

またそこらへんにいる小学生とするぞ。

シヨウ：

また埋め合わせするよ。

と言い教室を出た。

シヨウ：

ただいま。

ヨシカ：

おかえりー。

シヨウ：

あれ？

1人？

ヨシカ：

うん。

そうだよ。

グッドタイミングだな。  
よし。

シヨウ：

芳佳。

僕の部屋に来てくれる？

芳佳は顔を赤らめる。

ヨシカ：

う、うん。

分かった。

何か決心したように言う。

なぜだろう。

おかしいことを言っただろうか…

芳佳はスタスタと2階に上がる。

〈部屋〉

芳佳はそわそわしている。

初めて入った…でもないし。

まあいいか。

シヨウ：

単刀直入に聞くよ。

今日学校を休んだのは学校に行きたくないからだよね？

芳佳は待ち構えていた言葉とは違ったらしく返事に困っている。  
あわあわと。

ヨシカ：

な、なんでそう思うの？

少し落ち着いてから聞き返す。

シヨウ：

悪いと思ったけれど芳佳のことを調べた。

ヨシカ：

……………そう。

シヨウ：

先に謝るよ。

ごめん。

深々と頭を下げる。

しかし芳佳は、

ヨシカ：

いや仕方ないよ。

突然一緒に登校する約束を破ったんだから。

少し間が空いてから、

ヨシカ：

うん、そうだよ。

行きたくなかったんだ。

私友達いないし行っても意味がない。

私が学校に行っても場違いな目で見られるだけ。

本当に意味がないんだよ。

シヨウ：

そんな事はない！！

僕は叫ぶ。

僕はできる限り叫ぶ。

シヨウ：

富士最澄に聞いた。

クラスの子はみんな話しかけようとしてた。

しかし芳佳はふさぎ込んで聞こえもしなかった。

そうだろ？

ヨシカ：

…うん。

シヨウ：

それは芳佳が悪い。

しかしそれは過去の話。

それは取り戻せない。

ヨシカ：  
そう。

あれは私のせい。  
だけど今は違う。

彰のお陰で変わった。

変わることが出来た。

本当は学校に行きたい。

行ってみんなに謝りたい。

けど怖い。

どうなるか分からない。

それが本当に怖い。

足が竦むの。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い……

途中で僕は抱きしめる。

優しく、赤ちゃんを抱くように。

シヨウ：

そんな時は素直に人に頼ればいい。  
ここにいるじゃないか。

あの時誓った人間がすぐ近くに。

ヨシカ：

彰：

彰：

ありがとう……

うわぁー！！！！

何度目か僕の胸の内で泣いた。

もちろん泣きやむまですつと。

僕は聞いてみた。

なぜあんなに顔を赤らめてソワソワしていたのかを。

ヨシカ：

私達もう付き合ってるじゃない？

付き合ってる人の部屋に入るのって恥ずかしくて…

シヨウ：

………へ！？

付き合ってるって僕達が！？

ヨシカ：

そうよ。

私の事を守るって言うてくれたじゃない！？

シヨウ：

うん。

確かに言ったよ。

ヨシカ：

あれって告白じゃなかったの？

シヨウ：

そんなつもりで言ったつもりは無かったんだけど…

ヨシカ：

そうなの…

明らか悲しそうな顔をする。

芳佳のこんな顔を見たくない。

僕は決心した。

芳佳の目を見て手を取りゆっくりと噛みしめるように言った。

シヨウ：

僕と付き合って下さい。

そして僕はようやく芳佳に自分の気持ちを伝えることが出来た。  
僕達は付き合うことにした。

【第十五話】（後書き）

ようやく彰が自分の気持ちを伝えることが出来ました。  
変わったのは芳佳だけでなく彰も変わったのです。

御意見、御感想をお待ちしております。



## 【第十六話】（前書き）

第十六話投稿します。

寒いですね。

私の住んでいる場所は月曜日の雪が大変でした。

部活も雪合戦になりました。

みなさんどうでしたか？

てなわけでごゆっくりと見て下さい。

## 【第十六話】

翌朝、僕は少し早めに目が覚めた。  
少し緊張しているのかもしれない。  
下に降りてキッチンに向かうと芳佳は既にご飯を食べていた。  
目の下にはクマがあり、見るからに眠れていない。

シヨウ：

おはよう。

ヨシカ：

おはよう。

シヨウ：

よく眠れた？

ヨシカ：

いや…

全然眠れなかったよ。

俯きながら答える。

シヨウ：

そっか…

僕はそう言いつつ、芳佳の後ろに移動しおもいきりこそばした。

ヨシカ：

ひゃ…っ！？

彰！！！？

ちょ、やめっ…あはは  
きやはははは

笑いすぎて苦しそうだからこれくらいで 止めておけっ。

ヨシカ：

何するの！？

はー…はー…

ビクリするじゃない。

肩を激しく上下させながら言っ。

シヨウ：

どう？

緊張はほぐれた？

ヨシカ：

…え？

そういえば…

ありがとう。

…気をつかってくれて。

顔を赤らめて言っ。

やっぱり可愛い。

シヨウ：

どういたしまして。

実は僕も緊張してたりするからさ。

ヨシカ：

そう。

だったら…

芳佳はワキワキと指を鳴らしながら近づき（どうやったらあんなに別々に指が動くのだろう。）僕をこそばした。

シヨウ：

やめてくれはっははは

僕の声は家中に鳴り響いた。

（学校）

朝のやり取りがあつて芳佳の顔は少し明るくなったもののまだ暗い。そんなことも構わず時間は過ぎる。

朝のホームルームが始まる前に終わらせなければならぬ。教室の前に立ち二人で深呼吸をする。

スーハー、スーハー

シヨウ：

準備はいい？

ヨシカ：

うんっ！

ガラッ

勢いよく扉を開ける。

みんな驚いてこっちを見ている。

ヨシカ：

皆さんいきなりですみませんが、どうか私の話を聞いて下さい。

芳佳はゆっくり、ゆっくりと話し出した。

自分の過去やみんなの話を無視していた理由を。

それは数分間におよんだ。

芳佳は涙をこぼしながらも頑張り話し続けた。

みんなは茶化すことなく黙って聞いてくれていた。

真剣にしっかりと噛みしめるように。

中には静かに泣いている子もいる。

芳佳：

.....です。

だから今更言っても厚かましいだけかも知れませんが、私と友達になつてくれませんか？

女生徒A：

そんなの当たり前じゃない！

ねえみんな！！

男生徒A：

そうだよ！！

女生徒B：

当たり前よ！

みんな、いや全員が立ち上がりそう言うのだった。

ヨシカ：

ありがとう…

ありがとうみんな。

ついに芳佳は泣き出した。

今回は“悲しい涙”ではなく“嬉しい涙”だった。

【第十六話】（後書き）

さて、いよいよ終わりが見えて来ました。  
予定では次が最終話になります。  
御意見、御感想をお待ちしています。

【第十七話】（前書き）

最終話投稿します。

よろしくお願いします。



## 【第十七話】

今僕は鉄の車に乗っている。

その鉄の車はガタングタンとゆっくりと昇っていく。

そして鉄の車は頂点に達する。

その刹那、急降下した。

ヨシカ：

キャーーーーッ

ショウ：

ギャーーーーー！！？

そう、僕は遊園地のジェットコースターに乗っている。

なぜ僕がここにいるのか。

それは5日前にさかのぼる。

〽5日前〽

それは下校中の事だった。

僕が切り出した。

ショウ：

なあ芳佳：

今度の休みに2人で遊園地に行かないか？

ヨシカ：

……え？

今、なんて言ったの？

シヨウ：

だ、だからさ…

今度の休みに2人で遊園地に行かないか？

ヨシカ：

えーと、処理できてないからちょっと待ってね。

『うーん』と唸りながら今伝えた事を飲み込んでいく。

すると時間が経つにつれて芳佳の顔は赤く変わっていく。

そして…

ヨシカ：

はい。

よろしくお願いします。

（当日）

…と今に至る。

芳佳は絶叫系が好きらしく、この遊園地にある5つのジェットコースターに行くと言い出した。

正直に言おう！

僕は絶叫系が苦手なのである。

1つ目乗っただけで目が回る。

シヨウ：

ちよっと休憩…

ヨシカ：

よし！

次行っちゃおう！！

芳佳は興奮し、僕の話聞いてくれない。

芳佳に引きずられ全てのジェットコースターに乗った。  
すばらしく気分が悪い。

目がぐるぐると回り地面までも回っている。

ああ…

もうだめ。

ガクッ

ヨシカ：

ちよつと彰！

彰どうしたの…

芳佳の声が遠くなる。

ふと目が覚めると目の前には2本の綺麗なスラッとした足が…  
なんとベンチの上で膝枕させてもらっちゃっている。  
なんなんだろう。

このみんなが羨ましがするようなシチュエーションわ！……！  
しばらくの間寝たフリをしようかなと考えていると、

ヨシカ：

彰、起きたんだね。

良かった。

バレていた。

いつの間にかあたりは暗くなっていた。

ヨシカ：

ごめんね。

彰は絶叫系は苦手だったんだよね。

ショウ：

…いつから気付いたの？

ヨシカ：

最後のジェットコースターの時に気が付いたの。

あまりに顔色が悪かったから。

けど彰は大丈夫だって言ったの。

そしたら彰は倒れちゃって…

私のせいだよね…

彰には迷惑かけてばかり。

最初にあった時もそう。

病院のベランダもそう。

病院の屋上もそう。

芳佳は泣いていた。

僕は立ち上がる。

シヨウ：

それは違う！！！！

僕は全然迷惑だなんて思っていない！

僕が芳佳の事が好きでやっているんだ。

僕達ならどんな壁だって乗り越えるだろう。

いや乗り越えてみせる。

この物語が始まった時から僕はそう思っている。

ヨシカ：

…物語？

そこで僕は芳佳を抱き寄せ、

シヨウ：

そう、僕達の物語は芳佳が飛び出したあの時に始まったんだ。  
さあこれからもこの物語を僕達2人で歩いていこう。

ヨシカ：

…はい！！

僕達は歩き出す。

この物語という道をそって…

## 【第十七話】（後書き）

ついに最終話を迎えました。

なんかありきたりな終わり方をしたなと思ったのが本心です。

次の小説はもっと考えて書きたいです。

これで終わりのなので御意見、御感想をいただけると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5478o/>

---

あの時にこの物語は始まった...

2011年10月8日03時56分発行